

出生力の近接要因の動向：性・配偶関係・避妊・妊孕力

Proximate Determinants of Fertility:

Sexual Experience, Marital Status, Contraception, and Fecundity

別府志海（国立社会保障・人口問題研究所）

(beppu-motomi@ipss.go.jp)

守泉理恵（国立社会保障・人口問題研究所）

(moriizumi-rie@ipss.go.jp)

(National Institute of Population and Social Security Research)

近年、「少子化」が社会的な関心を呼ぶ中で、低出生力を扱っている調査は数多く行われるようになった。しかしながら、出生力を人口学的にきちんと位置づけ、人口学的分析が可能な調査は出生動向基本調査のみといえる。本調査では、出生力を分析するにあたって重要な要素である「近接要因」についても調査を行っている。出生力の近接要因とは性経験や配偶関係、避妊、妊孕力（受胎確率や妊娠の継続要素）といった諸要因であり、社会経済的な変数はこれらの諸要因を介して出生力に影響するという考えである。

本報告ではこうした出生力に直接影響を与える近接要因に着目し、これら諸要因の動向について紹介する。本報告で取り上げる近接要因は、次の5つである。

1. 異性交際

未婚者の異性交際の状況を見ると、「交際している異性はいない」の割合の上昇傾向に変化はみられない。交際している異性がない人では、「特に交際を望んでいない」という未婚者割合が増えつつある。他方で「いずれ結婚するつもり」の割合は8割弱と高い水準にあり、未婚者が結婚するか否かについて、何らかの葛藤を抱えている様子が浮かび上がる。

また、交際相手がいるものについて出会いのきっかけをみると、夫婦と同じく「学校」「職場」「友人やきょうだいを通じて」が3大経路となっている。ただ、長期的動向を把握できる夫婦調査のデータをみると、近年、職縁結婚の夫婦割合より友縁結婚の夫婦割合が上回ってきており、出会いの場の変化も読み取れる。

2. 結婚年齢

結婚相手との出会い年齢・平均初婚年齢をみると、本調査においても出会いの高年齢化、晩婚化の進展がみられ、調査を追うごとにいずれの平均年齢も上昇している。結婚の形態は、1960年代に恋愛結婚が見合い結婚を上回るようになったが、恋愛結婚の場合は交際期間が長く、かつ交際期間の長期化傾向も見合い結婚の場合より大きい。

未婚者について希望する結婚年齢を尋ねると、20～30歳代では男女とも1987～2015年間で1歳ほどの上昇に留まっており、晩婚志向が高まっているわけではない。結婚の希望と現実に乖離がある様子が見えてくる。

3. 性行動

性行動は出生に直接影響する。未婚者について性経験のない者の割合をみると、1990年代後半から2000年頃にかけて低下した後には上昇に転じている。若者の性行動の変化については、同様の傾向が他調査でもみられている。また、男女差の推移をみると、1980～90年代は男性の性経験率が女性を大幅に上回っていたが、2000年代に入ると女性の性経験率が大きく伸び、男性と大差ない状況となった。

4. 夫婦の避妊実行率

避妊実行率については、奇数調査回時（10年ごと）に調査されている。その結果を見ると、前回調査（2005年）に比べ、全年齢で大きく低下した。35～44歳でも4割の実行率にとどまっており、この背景には、晩婚化により高年齢で妊娠を希望する夫婦が増え、すぐにでも子どもが欲しいことから避妊実行率が低くなっている面があると考えられる。しかし、追加出生予定がない夫婦においても避妊実行率が大きく減少しており、他調査で指摘されているセックスレスの広がりも影響している可能性も考えられる。

5. 不妊・流死産

子どもを望んでいても出生に結びつかないケースもある。不妊については近年ほど「心配したことがある」とする夫婦が増えており、検査や治療を受けたことのある夫婦の割合も上昇している。不妊治療を受けた夫婦のうちで、子どもが生まれたケースは6割弱であった。

他方、妊娠はしたものの出生に至らなかった流死産を経験した夫婦の割合は1997年調査以降、15～16%でほぼ横ばいである。

これら出生力に直接影響を与える近接要因の動向を観察すると、全体として出生力を低下させる方向への変化が続いている。避妊実行率は低下傾向であることから出生力の上昇要因となり得るが、セックスレスの影響も考えられるため、その効果は精査が必要である。

近接要因のうち、出生率の低下に影響の大きい結婚行動に関しては、結婚の意思の変化が小さい一方で、異性との交際状況の不活発が広がるなどギャップが大きくなっており、日本の若者が意識と行動の狭間で葛藤しているように見える。